日本イギリス哲学会 第４９回 関西部会例会

日　時：２０１３年　１２月１４日（土）１４：００～１７：３５

場　所：関西学院大学大阪梅田キャンパス　アプローズタワー１４階　１４０１号室

前回とは会場が異なりますのでご注意ください。

交通アクセスは裏面の図でご確認ください。

報 告 １：１４：００～１５：４０（討論を含む）

報 告 者：武井　敬亮（京都大学大学院経済学研究科博士後期課程）

題　　目：１７世紀イングランドにおける教会・国家権力をめぐる議論の諸相

―パーカーとホッブズの比較から―

報 告 ２：１５：５５～１７：３５（討論を含む）

報 告 者：澤田　和範（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）

題　　目：ヒュームの哲学探究――三つの懐疑的議論の検討による一解釈

なお、各研究報告の要旨は、添付の別紙をご覧ください。

例会の後、簡単な懇親会を予定しております。こちらにもどうぞお気軽にご参加ください。

また、来年７月（予定）の部会報告をご希望の方は、以下の担当者あるいは事務局までお申し出ください。

関西部会担当

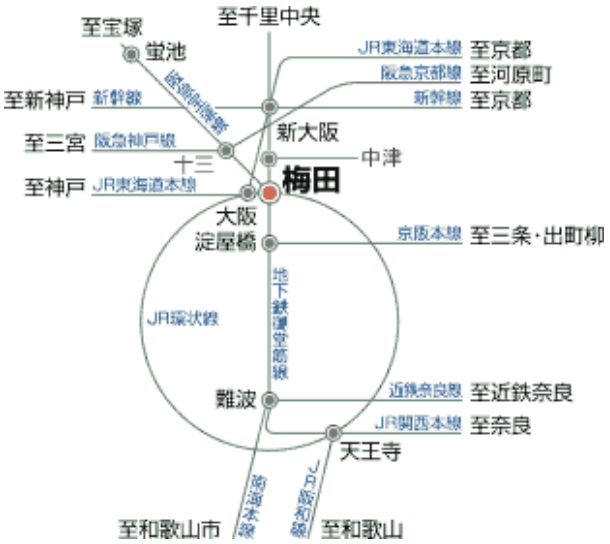
久米　　暁（関西学院大学、exkume◎kwansei.ac.jp）

竹澤　祐丈（京都大学、Takezawa◎econ.kyoto-u.ac.jp）

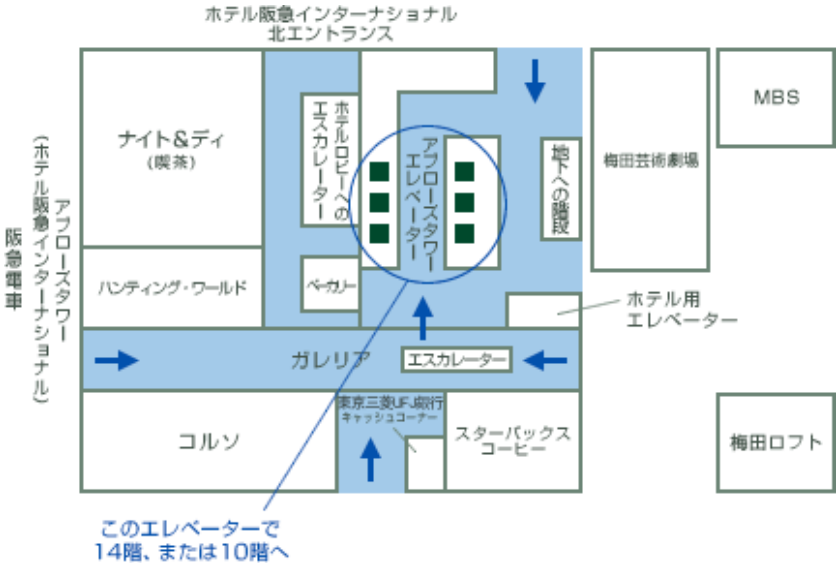
※◎を@にお直し下さい。

＜会場案内＞

関西学院大学大阪梅田キャンパス　　アプローズタワー（ホテル阪急インターナショナル）14 階
（阪急梅田駅 茶屋町口改札口より　北へ徒歩 5 分）
〒530-0013　大阪市北区茶屋 19-19　　TEL 06-6485-5611　　http://www.kwansei.ac.jp/kg_hub/



アプローズタワー（ホテル阪急インターナショナル）１階フロア図



＜日本イギリス哲学会　第４９回関西部会例会　報告要旨＞

報 告 1： 17 世紀イングランドにおける教会・国家権力をめぐる議論の諸相
—パーカーとホッブズの比較から—

武井　敬亮

17 世紀のイングランドでは、国家権力と教会権力の関係性をめぐって、断続的に激しい論争が繰り広げられていた。特に、君主が至上権によって両権力を保持しているのか、それとも、教会が国家とは独立した権威をもっているのかは、重要な対立点となっていた。

王政復古後、この問題が再燃する中、大主教ギルバート・シェルドン主導の下、国教会牧師サミュエル・パーカーは、『教会統治論』を執筆し、教会の独立した権威を擁護した。パーカーは、『聖書』やキリスト教史の特定の時代区分（成立以前、成立、国教化、教皇による権力の簒奪・宗教改革）に依拠して自説を展開する。こうした時代区分は、当時、広く共有されており、ひとつの議論の型をなしていた。パーカーが同著作で批判しているホッブズも、『リヴァイアサン』第三部で類似した議論を展開している。そこで、共通の議論枠組みを前提とした上で、解釈上の相違がどこから生じるのかを、具体的にパーカーとホッブズの比較分析を通じて明らかにすることが、本報告のねらいである。

（京都大学大学院経済学研究科博士後期課程）

報 告 2： ヒュームの哲学探究——三つの懐疑的議論の検討による一解釈

澤田　和範

重要な哲学的著作は体系的な理解が目指されるべきであるが、我々がそれをヒュームの主著『人間本性論』において試みるとき、非常にその扱いに苦戦してきたのは、彼の懐疑論であろう。本発表は、従来から懐疑論のテキストとして頻繁に議論されてきた箇所のうち、因果論、理性に関する懐疑論、第一巻結論を取り上げて検討する。私の見るところ、ヒュームの体系的な解釈を難航させる主原因が、次の二点にあるからである。(1) 上記の三つの議論はそれぞれ、懐疑的議論を意図されたものでもありながら、いわゆる自然主義的な主張をサポートする議論を含む。(2) 三つの議論は強く連関しており、それらを単独で考察しただけでは正しく理解できない。以上の観点から、本発表はヒュームの三つの議論についての解釈を提示し、ヒュームの哲学的立場を懐疑主義として特徴づける。そのことを通して、彼の自然主義や哲学探究をどう理解すべきかに関しても、一定の示唆を与えることができるであろう。

（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）